

平成23年 3月 7日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520290

研究課題名 (和文) ロンサールの作品における典拠としてのローマ文学と注釈再考

研究課題名 (英文) Roman literature as a source in the works of Ronsard and revision of notes.

研究代表者

延味 能都 (ENMI YOSHITO)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：90203679

研究成果の概要 (和文)：

ルネッサンス期のフランスの詩人 P. de Ronsard は詩作に際してローマ時代をはじめとする古典古代の詩人から多くの発想を得ている。本研究ではユリ、バラを中心にその使用法とユリとバラに関連する表現のソース (出所) を可能なかぎり調査し、分類し、従来は知られていなかった出典を示し、同様な表現の存在を指摘することができた。研究期間中には年一本のペースで着実に論文を発表した。また、論文はすべてフランス語で執筆し海外向け発信に力を注いだ。

研究成果の概要 (英文)：

P. de Ronsard, poet in the Renaissance of France, drew inspiration from the numerous poets and writers of Rome. This study examines mainly the use of lilies, roses and their sources and showed their classification. In addition, we noted the existence of similar expressions and their origins unknown before. While searching, we wrote an article a year regularly, which is written in French in order to publish the results to researchers abroad.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学 (英文学を除く)

キーワード：ロンサール、ユリ、バラ、古典、Ronsard, lis, rose, Antiquité

1. 研究開始当初の背景

ロンサールが頻繁に古典作品から表現や話

の展開を借用、あるいはその着想を得たことはよく知られている。しかし、それらのスー

ルス（典拠）の研究は、現在はそれほど活発に行われているとは言い難い状況にある。スールスとしての古典作品研究は主要な版である Laumonier 版と Pléiade 版の出現以来、一段落してしまったかのような印象を与えている。だが、一方では依然として出典の明確でない表現や話の展開、二つの版においても注釈の漏れ、不備などが存在しており、研究対象としては大きな領域として残っている状態にある。また、ロンサールには古典を背景とした同一・類似表現が多く現れるが、古典作品のデータベース化が大きく進展したにもかかわらず、ロンサールの詩編がデータベース化されていないこともあり、この方面の研究はやや閉塞した状況にある。

2. 研究の目的

以上のような状況を踏まえ、本研究は、自己作成のロンサール作品データベースを利用し、(1)ロンサールの作品における同一・類似表現と古典文学の関係、(2)ロンサールの同一・類似表現がどのように古典作品を利用して成り立っているか、を明らかにし、(3)古典作品に対する従来の「送り」の不備・不足、注釈の再考を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 自己作成のロンサールのデータベース、およびワードインデックスを用いて各種表現を検索して検討。

(2) ネット上の Perseus Project データベース、フランス国立図書館の *texte numérisé*、自己所有のデータベースにて古典作品内でロンサールの表現と関連する表現を検索し、検討。

(3) Creore の Word Index によれば *lis* に 136 例、*rose* に 270 例、*rosier* に 9 例の出現例がある。ローマ文学作品に置いては、

lilium（および変化形）に約 60 例、*rosa*（および変化形）に約 1000 の出現例がある。これらの全てが特定の表現を構成し、ロンサールの模倣と関わるわけではないが、これを分類しつつ検討をすすめる。

(4) 類似表現・展開、同一表現・展開を分類し、古典からロンサールへの変化を検討。

(5) 主要な版の注釈の再検討

(6) 同一・類似表現と古典作品との対象リストの作成

(7) 論文執筆

4. 研究成果

■平成20年度は主にロンサールの作品に頻出するバラとユリの共出現の問題を研究し、一本の論文（フランス語）を執筆した。

A. E. Creore のインデックス (1972) によれば、ロンサールの作品に於いて、バラの出現数は 265 であり、ユリの出現数は 136 となっている。この内、89 例が両者の共出現となっており、これはユリの出現数の 65 パーセント、バラの出現数の 33 パーセントを占めており、これらの花にとり共出現の持つ意味は大きい。

共出現は初期の詩集の段階ですでに現れ、それが晩年の版においても存在し続けているという点で、ロンサールがこの共出現を嫌ってはいなかったことが判る。このバラとユリの共出現は様々な形で現れており、その意味も多様である。本年度は多様な意味の中から、異教的儀式との関連、祝福、喪を中心にし、古典作家との関連も踏まえて考察を行った。

その結果、以下のような点を明らかにした。

(1) バラとユリは他の花と共に空（天）から降り注ぐ出現様式をとるが、その場合は多くは祝福の意味を持つ。

(2) バラとユリは他の花と共に、人間や女神、ニンフなどによって撒かれる場合がある。

(3) バラとユリは他の花と共に、自然に生い

茂り祝福する場合がある。

(1)および(2)については、参照した二つの全集（ローモニエ版およびプレイヤード版）でいくつかの典拠を候補として挙げている。しかし、本稿の研究の結果、スタティウスの祝婚歌の一節（Stace, *Silvae*, I, 2, *Épithalame de Stella et de Violentilla*, v.17-23）もまた天から降り注ぐ花に言及しており、典拠の一つとして考えられる。

一方、バラとユリがあたかも花というものを象徴するかのように好まれ、共出現を構成する点については、赤と白の鮮明な対比の美しさがオヴィディウスの一節で歌われており

（Ovide, *Amores*, II, V, v.37），また、同じくオヴィディウスの一節（Ovide, *Fastes*, IV, v.337-443）では、プロセルピナが冥府の王プルートに拉致される前に野で花を摘む場面が描かれているが、彼女はバラとユリを好んだとして、これらの二種類の花にやはり優越性を与えている。

■平成21年度は前年度に続き主にロンサールの作品に頻出するバラとユリの共出現の問題を研究し、一本の論文を執筆した。海外向けの発信を意識して論文はフランス語で執筆している。

ロンサールにおけるバラとユリの共出現は様々な形で現れており、その意味するところも多様である。前年度は「異教的儀式」、「祝福」、「喪」キーにして全作品から関連する記述を集め、ローマ古典作家との関係を中心に考察したが、本年度は多様な意味の中から、「平和」、「平穩」、「安全なる場所」、「春」中心にし、古典作家との関連やいわゆる「黄金の時代」との関連も踏まえて考察を行った。

バラとユリは、「花」一般を象徴する代表的な花としてまず最初に「春」の象徴である。

しかしその「春」は季節としての春という把握しやすい具体的な意味から抽象的な意味までの広がりを含んでいる。このバラとユリによる象徴は、使用されると、ほぼ自動的に一連の連想を喚起する。まず始めに具体的な意味で季節を表す「春」が喚起され、それはたとえ暫定的なものではあるといえ、1546年のアルドルの和約によって漸く実現された「平和」へとつながって行く。そしてそれはさらに「黄金の時代」のステレオタイプな描写へと移行し、同時に、寒気や嵐、その他の危険によって脅かされることのない安全でこころ休まる場所をも象徴するようになってゆく。

この過程でローモニエ全集1巻に収録されている「フランスの讃歌」、第8巻収録の「哲学の讃歌」、9巻収録の「牧歌-サヴォワ公爵夫人マルグリット殿へ」、13巻収録の「スコットランド王妃への田園詩」などに出現するバラとユリについてこれまでの全集の注釈では触れられていなかった部分を補った。

■平成22年度はとりわけユリの花とその色が想起させるものについてローマ文学との関連を論じ、論文を発表した。本年度の研究で明らかになったことは以下のようなことである。

ロンサールは王家を示すユリを一般的な *lis d'or* という名称では使用しておらず、使用例は読解を通じてしか見つからないが、本年度の研究では、この王家のユリのすべての例を示した。それらを検討すると、ロンサールは王家のユリの「色」を示すことは一度として行なっておらず、例外はクロービスのユリの場合の一例のみである。

ユリの色の基本的な意味付けは「白」である。これにより、ユリを使用することで女性および男性の肌の白さを表すことができる。ユリを赤いバラや赤いカーネーションと組み

合わせて利用することにより、ほんのりと赤みを帯びた白い肌の描写を行っている。とりわけ白と赤のコントラストを巧みに使い、色の名前を用いずに「白」、「ほんのりと赤い白」を連想させている。ロンサールは、一度だけ、アンリ二世の死の悲しみを表現するために「黒いユリ」を比喩的に使用している。

参考にした両版にないものとして以下のよ
うな注釈を加えることができる。

- (1) ローモニエ全集第5巻, p. 236, À la fontaine Bèlerie, v. 63-64 《Et son beau cors, qui resenble / Aus lis & roses ensemble》に関して、同様な表現が、ローモニエ全集第2巻, p. 164, Bocage de 1550, III, À Cassandre, v. 19-20 に認められる。
- (2) ローモニエ全集第13巻, p. 98, Bergerie dédiée à la Majesté de la Royné d'Escosse, v. 447-450 に関しては、Calpurnius が恋人の不在の悲しみを黒いユリで表現している。出典は Calpurnius, *Églogues*, 3. v. 45-48, "te sine, vae misero, mihi lilia nigra videntur / nec sapiunt fontes et acescunt vina bibenti. / at si tu venias, et candida lilia fient / et sapient fontes et dulcia vina bibentur" 「お前が居ないと、なんという不幸か、そのせいで私にはユリが黒く見える。泉は味わいを失い、ぶどう酒は酸っぱくなってしまふ。そしてお前がやってくるとユリは白くなり、泉は味わいを取り戻し、ぶどう酒は美味しく飲めるようになるだろう」と考えられる。
- (3) クレオールのインデックスがあげる136例のユリの出現回数には、一つだけ地名が含まれている。ローモニエ全集第8巻, p. 230, v. 15 の《[Le] Lys》は地名で

ある。

上記の結果は、ロンサールに関しては、ユリの花を中心とした網羅的な研究が無い現状では貴重なものであり、さらに、権威あるローモニエ版、プレイヤーード版の触れていない部分を注として補った点で意味あることである。

今後の展望としては、これまでの研究の成果を踏まえ、ロンサールの作品と古典作品の関係を植物を中心とした観点から一層の体系化を目指す必要がある。また、イタリアからの影響も無視するべきではなく、同国の詩人の影響も含めて調査・研究を行うことで研究の幅と質を上げてゆきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 延味 能都, *Évocations du lis et de ses couleurs chez Ronsard - lis d'or, lis blanc et lis rosé -*, 岡山大学ヨーロッパ言語文化研究, 無, 第30号, pp. 27-49, 2011.
- ② 延味 能都, *Occurrences conjointes de la « rose » et du « lis » chez Ronsard 2 - paix, lieu sûr, printemps et auteurs latins -*, 岡山大学ヨーロッパ言語文化研究, 無, 第29号, pp. 2-29, 2010.
- ③ 延味 能都, *Occurrences conjointes de la « rose » et du « lis » chez Ronsard 1 - rite païen, célébration, deuil et auteurs latins -*, 延味能都, 岡山大学ヨーロッパ言語文化研究, 無, 第28号, pp. 37-61, 2009.

[その他]

ホームページ等

[http://www.okayama-u.ac.jp/user/rons-ar
d/houkoku01.htm](http://www.okayama-u.ac.jp/user/rons-ar
d/houkoku01.htm)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

延味 能都 (ENMI YOSHITO)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准
教授

研究者番号 : 90203679